

日本篆刻家協会会報

第20号 平成30年4月1日発行
発行：日本篆刻家協会
563-0032 池田市石橋2-2-10-203
TEL 072-760-3852 FAX072-760-3853
E-mail: info@n-tenkoku.jp
http://www.n-tenkoku.jp

平成三十一年度総会開催 規約改正と尾崎新会長誕生

平成三十一年度総会が一月七日（日）、大阪市上六のシエラトン都ホテル大
阪で開催され、全国各地から役員、会員計百七十一人が参加した。

総会に先立ち一月六日（土）企画委
員会、七日（日）十三時半から常務理
事会、十四時から理事会が開かれた。

総会は十五時から、井谷五雲理事長
が議長に選出され進められる。平成
二十九年度事業報告、同決算報告、同
会計監査報告、平成三十一年度事業計画
案、同予算案、協会規約の変更、役員
改選案が提案され、いずれも原案通り
承認された。規約の変更により会長職
を設け、理事長の任期を三期まで延長
することとなった。会長には尾崎蒼石
先生にご就任頂いた。尾崎会長、井谷
理事長には今まで以上にその手腕を発

揮していただき、今後ともご指導を賜
りたい。

総会に引き続き十六時から新年懇親
会が開催された。理事長挨拶で開幕し、
古溝幽畦常務理事の司会で進められた。
山下方亭常任顧問の乾杯の発声で開宴
し、新役員の紹介と決意表明があり、
新会長、理事長のもと一致団結して事
業、研究に取り組んでいくことの確認
ができた。また新年会恒例になってい
る企画委員からの賞品、課題年間優秀
の表彰等で盛り上がり、和気藹々と交
流を深めていき、平田蘭石副理事長の
挨拶で幕を閉じた。（喜多芳邑）



今年度の運営について基本的事項を協議する理事会

会長に就任して

会長 尾崎蒼石



この度、新設の会長に推挙いただき、その職をお受けいたしました。就任に当たり、一

言ご挨拶をさせていただきます。

師、梅舒適先生が創立されました協会も三十四年の歳月を歩んで参りました。日本で唯一、篆刻のみの公募展として発展し、日本の篆刻界に大きな影響を与えてきたのは事実です。また、梅先生が提唱の中国との篆刻交流は現在でも脈々と続いております。交流によつて多くを学び、そして広く日本での篆刻の普及に力を注いできたことは、申すまでもありません。

本年、日本篆刻展は三十四回展を迎えました。また、将来を見据えて行っている小・中・高校生の公募展も回を追う毎に出品数が増加している状況です。将来の篆刻界にとつても実に良いことと考えております。

今後共、役員、会員の皆様と共に日本篆刻家協会の発展に微力ではありますが力を注いで参りたいと思ひます。何卒、よろしくお願い申し上げます。

平成三十年のスタートに際して

理事長 井谷五雲



平成三十年の日本篆刻家協会は既に動き出しております。一月六日に本

年最初の企画委員会が宝塚で実施され、翌日にシエラトン都ホテル大阪において総会並びに新年会が開催されました。総会では本協会の規約を一部改定して、新たに「会長職」を設置し、尾崎蒼石常任顧問に就任していただくことになりました。本協会の組織をより堅固なものにし、多くの会員諸氏に協会所属メリットを感じていただくためには必要との判断を、皆さんとともにできたからです。また来年の新年総会は北陸で開催、再来年は静岡県で開催することが内定しました。近畿圏から離れての開催には参加者数の不安もなくはありません。しかし、それ以上に開催地周辺の一人でも多くの会員のみなさんとお会いしたいと思ひ、皆さんの忌憚のないご意見をお聞きし、活動の支援をしたいという思ひからの実施であります。

本年の行事の中では既に第三十四回日本篆刻展の審査会が終了し、その開幕を待つばかりとなっております。また三月に入つて、

日本と台湾の「青年篆刻交流展」が台北の国父記念館で開催。選抜された日本・台湾それぞれ三十名、計六十名の若手交流展が盛大に開催され、本協会からも私と古溝常務理事が七名の出品者とともに台北に行つて参りました。

また、本会報も二十号に達しました。十年の長きにわたつて制作の労を願いました酒居代表理事やスタッフの皆さんに感謝の意を表したいと思ひます。今後内容の充実に努めていただき、本協会の事業の一翼を担つて欲しいと思ひます。四月二十八日からは古河市の篆刻美術館で第十回日本篆刻家協会役員展が開催されます。八月四・五・六日には神戸舞子での中央研究会が待つております。また各印社・グループの作品展の計画も届いております。そして来年は日本篆刻展三十五回の節目を迎えます。

さて、このように速やかな時間

の中で、一歩一歩地歩を固めながら自己の芸術を磨くとともに、本協会の健全な有り様を模索推進することはそんなに簡単なことではありません。そもそも芸事に励むのはいかに趣味的と言つても孤独で厳しいという側面をもつております。

その厳しさに謙虚に向かい合つて取り組むには仲間や適切な師を必要とするものです。本協会がそのふさわしい場所であり続けるために、皆さんと不断の努力を惜しまないつもりでおります。幸いにも次第に次代の担い手も育つてきていることを実感できるようになつてまいりました。印社代表者や協会幹部の先生方と十分に意見交換をしながら、また千名の会員諸氏と十分に意思の疎通を図りながら、力を合わせて本協会の発展に尽力していきたいと思ひます。更なる皆さんのご協力をお願いいたします。一言ご挨拶いたします。



全国各地から会員が参集した総会



新役員の紹介



恒例の福引の一コマ



新年懇親会で挨拶する井谷理事長

平成三十年度役員

【常任顧問】

山下方孝

【会長】

尾崎蒼石

【理事長】

井谷五雲

【副理事長】

喜多芳邑

【顧問】

真鍋井蛙

【代表理事】

市川両僊

【常務理事】

伊藤雅夫

【名譽理事】

渡邊和琴

【参事】

小林睦水

【理事】

足立瑠泉

【参事】

松本雅至

【参事】

南岳泉

【参事】

畔原裕美

【参事】

射場少藍

【参事】

大橋安泰

【参事】

木村容庸

【参事】

下井瑤琴

【参事】

田原泉山

【参事】

滑田寒鴉

【参事】

松本岬風

【参事】

米田黄苑

磯村育治 伊藤淨盒 稲葉竹葉 上田静雲

植野無人 内田紅楓 大槻彦裔 加藤静雲

金谷政治 川久保明 川西卯水 北野河聲

倉野看雨 劔田白峰 小谷知洲 坂上香艸

佐藤正明 正和杏葉 白尾芳雲 杉本素月

関野羊越 大我羊 高野弘深 多田学友

田中九成 田中瑞峰 玉村芙蓉 丹下青風

中島大夢 中田東光 永野草翠 西田茜秋

橋本碧峰 服部九姚 花村秀嶽 林旦山

樋口桃園 藤川曼美 藤田孝風 藤瀬尚子

堀口秀雄 本江惠翠 増田繁治 松阪聖岳

松田泰軒 松本弘碩 水上健治 水巻游光

宮野宗雄 森豊苑 山崎一雄 醍岡慶石

吉田宗里 若杉彩雲

青木嘉代子 青木雄山 秋山捷華 浅野江涯

浅野春泉 浅野祥雲 浅野道男 浅野和泉

浅良朱華 池田蘆翠 石川無外 石留之然

伊藤錦汀 伊藤梅香 今村董圃 上松莊夢

内田真弓 宇都宮蘭雪 梅原玉翠 大倉章義

岡上汀華 岡田桂舟 岡端如輪 小川匪石

尾川雅舟 小國妙子 尾原衣香 櫛野麗琴

片畑仁美 加藤正順 川崎白水 川田紅溪

北田成磊 橘高香流 木本研塵 串田一逕

小森香苑 近藤胡蝶 嵯峨洛山 阪口香雪

静一華 渋谷春好 嶋田杏園 鈴木紀山

鷹取千豊 巽聖石 立石見聲 田中皋仙

谷桜洲 千蔵天空 千葉晨翠 寺田和仁

寺田濤雲 寺本翠葉 土井青雅 得永春水

中野聡 仲森蓬園 名倉克彦 西岡青淡

西口青咲 野中紫光 島穆風 畑間青露

八月課題

「聊白樂」

役員(小朴圃選)



燕安



碧泉



白水



董圃



繁治

常任委員(伊佐治祥雲選)



秀風



敬次



惠草



井泉



博石

委員(石原豊玉選)



正明



不條



秋舛



滋



雪峰

會員(出田塘葭選)



勝山



管玉



正彦



幸園



登志美

一般(奥田農生選)



俊彦



碧翠



玉芝



幹石



勝竹

九月課題

「龍得水」

役員(渡邊和琴選)



知洲



祥風



仁美



游光



章石

常任委員(梶川久美子選)



浩佳



華紅



誠



謙之



戲石

委員(梶田稻州選)



昌子



穆風



黎秀



静二



正明

會員(草田翠苑選)



管玉



信夫



黃瑞



素風



雅宣

一般(熊本夕生選)



三徳



幹石



豊



正子



八哥

- 【役員】 名倉夕彦 ○小谷知洲 松野碧露 ○村田祥胤 畑野真露 ○古瀬章石 木村容庵 ○浅野道男 土井青雅 池谷宝樹 計五〇人
- 【常任委員】 松永平峰 ○花房浩佳 三枝龍泉 ○福谷春壽 伊谷昌子 北岡弘子 ○馬場穆風 渡谷春壽 ○武田黎秀 青山正人 ○八木正明 吉岡龍生 ○白幡雪峰 水谷劔石 ○松浦雅宣 舟田清志 ○藤田勉 遠藤幽堂 伊神千博 向仲輝雄 計五一人
- 【委員】 森口淡石 ○中本管玉 翠上丹臺 ○松村信夫 森清光 ○堀黄瑞 成瀬登志美 ○坂中弘 ○吉田豊 ○大平正子 尾藤登茂吉 後藤登茂吉 尾畑架施 計五一人
- 【會員】 田邊進 ○三徳 後藤登茂吉 ○藤田架施 計五一人
- 【一般】 広森勝竹 ○藤田架施 計五一人

十月課題

「少無宦情」

役員(山下方亭選)



静雲



董圃



吳山



章石



容甫

常任委員(黄平齋選)



碧風



榮子



戴石



浩佳



悦子

委員(榊原晴天選)



劉石



管城



昌子



淡石



群蛙

會員(田中修文選)



光崖



散花



悦治



勝山



幽篁

一般(堤白遊選)



真紀



勝竹



八哥



三徳



知洲

- 〔役員〕 古野燕安
- 上田静雲 倉野春軒
- 今村重山 松田泰軒
- 田原貞山 増田繁治
- 古瀬草石 田中九成
- 木村容甫 青木雄山
- 渡邊尚石 名倉克彦
- 丸山沙舟 畑間青露
- 計五三人

- 〔常任委員〕 池谷宝樹
- 萬谷碧風 田中紅珠
- 中井榮子 梅田五月
- 岡崎戯石 吉崎雲壺
- 花房浩佳 長谷山墨石
- 黒田悦子 山崎井泉
- 津田秀鳳 金井桐華
- 福谷華紅 上野鶴羽
- 計四六人

- 〔委員〕 市川桂水
- 木谷劉石 青山正人
- 中本管城 鈴木桂峰
- 伊谷昌子 木島智子
- 森口淡石 永田乾石
- 田原群蛙 白幡雪峰
- 中村紀久 平松清嗣
- 奥島極浦 八木正明
- 計四五人

- 〔會員〕 中本管玉
- 伊藤光屋 山本智子
- 池田敬夫 山崎正彦
- 兼子悦治 堤黄瑞
- 大野勝山 成瀬登志美
- 遠藤幽篁 岡本浩一
- 井畑喜雨 田邊進
- 栗永美舟 鈴木素風
- 計四七人

- 〔一般〕 大塚多恵子
- 松屋真紀 三宅洋子
- 北畑謙之 山崎恵子
- 楊八哥 牛島鈴輪
- 後藤知洲 小倉俊彦
- 吉田豊 尾畑翠庵
- 山中徹人 小澤宣
- 計二八人

十一月課題

「斬釘截鐵」

役員(尾崎倉石選)



尚石



繁治



吳山



芳泉

常任委員(中村葉舟選)



悦子



謙之



惠子



平峰



浩佳

委員(長谷川帰海選)



極浦



黎秀



典恵



雪峰



匠

會員(古溝幽畦選)



喜雨



澄山



黄瑞



妙子



溪月

一般(松本雅至選)



晶石



徹人



龍泉



勝竹



翠庵

- 〔役員〕 古野燕安
- 渡邊尚石 木村容甫
- 増田繁治 宮越素翠
- 田原貞山 千蔵天空
- 安井芳泉 上田静雲
- 遠藤美入 畑間青露
- 大槻彦裔 田中九成
- 葛岡慶石 島藤風
- 計五〇人

- 〔常任委員〕 松川白遊
- 奥島極浦 中野桃華
- 黒田悦子 津田秀鳳
- 北畑謙之 大東莢夷
- 永井恵子 吉田鏡水
- 松永平峰 永野草翠
- 花房浩佳 永井深舟
- 長谷山墨石 高橋忠義
- 池谷宝樹 滝口照影
- 計四九人

- 〔委員〕 川端不條
- 武田黎秀 木村行石
- 荒井典恵 市川桂水
- 白幡雪峰 内田哲舟
- 安俣匠 井上秋鹿
- 永田乾石 益邑隆
- 計四六人

- 〔會員〕 中本管玉
- 井畑喜雨 大野勝山
- 水中澄山 松島青樞
- 堤黄瑞 橋本陽一
- 玉井妙子 池田敬花
- 三宅淡月 松村信夫
- 森下正義 山本智子
- 寺地春和子 兼子悦治
- 計五一一人

- 〔一般〕 大塚正子
- 諷品石 三徳多恵子
- 山中徹人 大塚多恵子
- 池内龍泉 鈴木千春
- 広森勝竹 山崎恵子
- 尾畑翠庵 川尻政夫
- 小倉俊彦 正江
- 石場深州 福庭義明
- 計三一人

十二月課題

「古人重讀書」

役員(井谷五雲選)



明峯



彦裔



慶石



燕安



敏子

常任委員(松本雅至選)



博石



碧嵐



榮子



草翠



泰道

委員(御手洗眉山選)



静二



極浦



五岳



貴美子



龍生

會員(池田泥異選)



智子



勝山



登志美



幸園



悦治

一般(伊佐治祥雲選)



俊彦



豊



恵子



徹人



八哥

一月課題

「無求」

役員(喜多方邑選)



明峯



草翠



正步



燕安



仁美

常任委員(石原豊玉選)



井泉



管城



霞舟



秀風



博石

委員(出田塘霞選)



龍生



貴美子



昌子



勝山



劉石

會員(大村雪陵選)



駿



龍泉



哲幸



雅宣



光雄

一般(奥田農生選)



俊彦



靖武



鈴輪



溪州



豊

- 【役員】 山崎一雄
 ○石亀明峯 谷根洲
 ○大槻彦裔 増田繁治
 ○飯岡慶石 宮越素翠
 ○古野燕安 水巻游光
 ○南敬子 上田静雲
 ○長谷川拓 立石見聲
 渡邊尚石 川崎白水
 計四人
- 【常任委員】 津田秀風
 ○小澤博石 高橋忠義
 ○萬谷碧嵐 中島敬次
 ○中井榮子 番定静山
 ○永野草翠 田中紅珠
 ○西岡美子 山下登雲
 ○吉岡龍生 伊谷昌子
 平松清嗣 井上秋鹿
 木谷劉石 前田静庵
 計八人
- 【委員】 中本管城
 ○森静二 木村行石
 ○奥島極浦 小澤一哉
 ○小松五岳 田原静蛙
 ○西岡美子 山下登雲
 ○吉岡龍生 伊谷昌子
 平松清嗣 井上秋鹿
 木谷劉石 前田静庵
 計四人
- 【會員】 遠藤幽篁
 ○山本智子 服部和彦
 ○大野勝山 高木啓志
 ○永野草翠 相川良孝
 ○成瀬登美 田邊進
 ○中島幸國 松浦雅宣
 ○兼子悦治 松浦雅宣
 ○横山光宇 梶田惠子
 上田玉雲 向仲輝雄
 計十三人
- 【一般】 沢田千春
 ○小倉俊彦 鈴木正子
 ○吉田豊 大平正子
 ○山崎恵子 正江
 ○山中徹人 池内龍泉
 ○八哥 広森勝竹
 ○楊八哥 池内龍泉
 ○御手洗亮 三宅洋子
 尾畑翠庵 大塚恵子
 計十二人

- 【役員】 名倉正彦
 ○石亀明峯 安井芳露
 ○丸山沙舟 今村重國
 ○片畑仁美 増田繁治
 渡邊尚石 田原山
 藤綱尚子 松川白遊
 計五人
- 【常任委員】 平松清嗣
 ○山崎井泉 鈴木惠草
 ○吉岡龍生 藤田勉
 ○西岡美子 藤谷春壽
 ○伊谷昌子 永田乾石
 ○大野勝山 矢持秀峰
 ○木谷劉石 山杉博子
 ○松本光雄 枝廣樹芳
 ○松浦雅宣 服部和彦
 ○吉田哲幸 植田杏牙
 ○石場溪州 廣森勝竹
 ○吉田豊 福庭義明
 小倉俊彦 藤井聖子
 小川靖武 松屋真紀
 大塚多恵子 大塚多恵子
 山崎恵子 川尻蒼山
 計四三人
- 【委員】 中野桃華
 ○藤田勉 藤谷春壽
 ○池内龍泉 池田敬花
 ○松浦雅宣 植田杏牙
 ○廣森勝竹 服部和彦
 ○吉田豊 福庭義明
 小倉俊彦 藤井聖子
 小川靖武 松屋真紀
 大塚多恵子 大塚多恵子
 山崎恵子 川尻蒼山
 計四三人
- 【一般】 楊八哥
 ○小倉俊彦 藤井聖子
 ○小川靖武 松屋真紀
 ○大塚多恵子 大塚多恵子
 ○山崎恵子 川尻蒼山
 計四三人

二〇一八東西篆刻家交流会 (in名古屋) 報告

二月十二日、東西篆刻家交流会が中部地区名古屋の地に於いて開催された。この交流会は東日本大震災の復興支援として、二〇一三年に全国初の大規模な企画展「がんばろう東北篆刻展」が岩手県盛岡市において開催されたことを機に、全国の代表的篆刻団体である日本篆刻家協会、扶桑印社、全日本篆刻連盟の交流が盛んとなりその後、神戸・東京において行われるようになった。これまで篆刻関係者約百名前後の交流会だったが、今回は中部書壇の先生方の参加もあり、講演会四百三十名、懇親会三百名

講演する日本篆刻家協会尾崎会長



の大規模交流で会場は名古屋東急ホテルで行われた。企画の指揮を執られたのが岡野楠亭先生で、運営は主に瑤藍印社の方々が行われ、他にも全日本篆刻連盟から鈴木立齋先生、波多野公一先生、懇親会司会を日本篆刻家協会の私が任せられた。今年の講師として本協会会長の尾崎蒼石先生と扶桑印社運営委員長稲村龍谷先生が講演された。尾崎先生は「戦国古璽印」と題して中国戦国期古璽印・古陶印を展示され、印材の形状・印面・印影と当時の年表と領土分布図をテキストで紹介された。特に



スライドを交え講演する稲村運営委員長

戦国七雄により文字がまったく異なることを金文の「馬」を例に挙げ、その後には秦の始皇帝により文字の

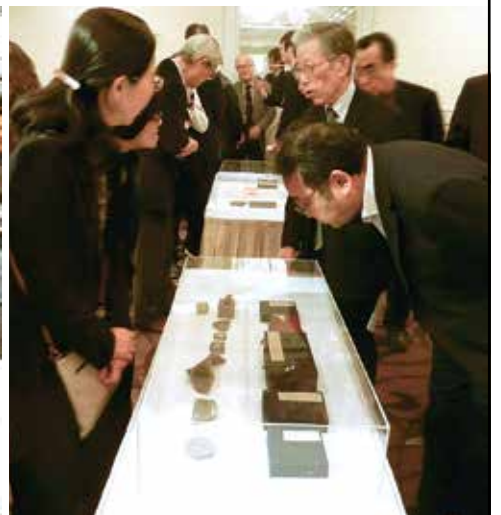
統一が行われ、小篆の完成により属国の文字は消えていったという文字の不思議さを解説された。そして稲村先生は「私の篆刻観―印を刻る楽しさ―」をテーマに『書道講座 篆刻編』(二玄社) 初版より日本の印人語録や印のまとめ方、章法の考え方を自身の作品と経験をもとに講演された。作品製作中に思わずできてしまった欠けについて「欠けたところでも欠いたと言え」の説明がおもしろく、「あつ欠けた」とか「失敗した」とかいふことが篆刻ではしょっちゅうあるが、人に言うときは意図的に「やった」、「このように作ったと言っただ」 という率直な語り口が聴衆を魅了した。お二人の講演が終わると解散というのが、今までの流れだったが、新たに懇親会を催し交流を一層深めた。乾杯の音頭を中日書道会理事長関根玉振先生にお願ひし、その後、三団体代表にご挨拶をいただき懇親会は

おおいに盛り上がった。日本篆刻家協会の先生方がたくさんご参加くださり、とても心強く思った。最後は副理事長平田蘭石先生の中締めの言葉で閉会した。今回スタッフの一人として企画の段階から携わること、東西篆刻家の絆が深まり幅広い有意義な交流会になったと感じた。(田中修文)

広い会場を埋めつくす多くの参加者



講師持参の参考品を熱心に鑑賞





審査に先立ち基準等協議する審査員会議

第三十四回日本篆刻展「審査会」

「第三十四回日本篆刻展」の審査会が三月二十五日、神戸市の兵庫県立美術館王子分館会議室で行われた。

幹部役員を除き、全国から寄せられた評議員、参与、常任委員、委員、会員、公募の作品総数六八四点を対象に十九名の審査員が鑑別審査にあたった。今展から参与に会長賞が新設されるなど、新企画を加えての審査となった。慎重かつ厳正な審査の結果、参与から顧問賞一点、同会長



慎重に審査に当たる審査員

賞一点、評議員から梅舒適賞三点、常任委員から日本篆刻展大賞一点、同準大賞六点、同優秀賞十七点、委員から奨励賞三十九点、会員から特選三十一点、秀作五十五点、公募から会員推薦賞五十二点が選ばれた。尚、委員奨励賞から寄託賞二点、会員特選から寄託賞四点が選出された。
作品は四月十八日から二十二日までの会期で、兵庫県立美術館王子分館（原田の森ギヤラリー）にて、特別展観「赤壁賦にちなんで」、第二回日本篆刻家協会学生展」とともに展覧される。

● 審査委員長

理事長 井谷五雲

● 審査員

常任顧問 山下方亭

会長 尾崎蒼石

顧問 市川兩徳

副理事長 喜多方邑 多田龍淵 中島春緑

代表理事 平田蘭石 真鍋井蛙

伊藤雅夫 黒田玉洲 酒居石荘

小朴圃 渡邊和琴

常務理事 池田泥異 梶川久美子 熊本夕生

田中修文 御手洗眉山

■ 梅舒適賞選考委員

常任顧問・会長・理事長・副理事長 八名

■ 大賞選考委員（準大賞・優秀賞）

常任顧問・会長・理事長・副理事長・代表理事 十三名

■ 日本篆刻家協会顧問賞・会長賞

常任顧問・会長・理事長・顧問 四名

■ 学生展選考委員

理事長・常務理事 六名



審査会場いっばいに並べられた出品作

主な受賞者

◆梅舒適賞（評議員）

横井青蓮 畑間青露 山本寿法

◆日本篆刻家協会顧問賞（参与）

花村秀嶽

◆日本篆刻家協会会長賞（参与）

永野草翠

◆日本篆刻展大賞（常任委員）

萬谷碧凰

◆日本篆刻展準大賞（常任委員）

松永平峰 吉原愛璃 北畑謙之
新井散葉 藤本蘇西 妻鳥明子

◆日本篆刻展優秀賞（常任委員）

三枝龍泉 山口藤華 工藤芳悦
東 緑園 谷村青苑 久田方琥
荒谷清光 乃村翠琴 橋本游月
福谷華紅 藤澤涼子 山崎井泉
清代啼鳥 大原 誠 藤本忠義
中本管城 堂守唯文

学生展

◇最優秀賞（高校生）

大橋千歳

◇優秀賞（高校生）

大村茜音 白神千咲 谷澤さくら
山田華加 古谷初奈 神戸菜菜
森口葵 丈達もか 吉村勇人
梶木舞穂



評議員作品から梅舒適賞を選考



学生展高校生の作品審査に当たる審査員



THE SEAL ART EXHIBITION BY
TAIWANESE AND JAPANESE YOUTH

台日青年篆刻交流展

2018年3月10日(六) ▶▶▶ 3月25日(日) 9:00-18:00

主辦單位/中華民國篆刻學會 協辦單位/台灣印社、全日本篆刻聯盟、扶桑印社、日本篆刻家協會、大東文化大學書道學科 國立國史館

会場正面の大きなパネル

日本から開幕式に参加の出品者・関係者



は故宮博物院を見
二日目の午前中
ができました。
た時間を過ごすこ
日が大変充実し
工夫がなされ、初
の博物館にはな
め展示方法や照明
の当て方などに他
ない博物館を目指
しました。そのた
め展示方法や照明
の博物館にはな
工夫がなされ、初
日が大変充実し
た時間を過ごすこ
とができました。

台日青年篆刻交流展

故河野隆先生の肝いりで進められた本計画は、日本から四十五歳以下の三十人、台湾から同数の青年篆刻家に参加して台北市国父記念館で開催された。日本側三団体の一つ、本協会からは嵯峨洛山・稲垣華扇・石川無外・井後雅堂・川端不條・木村佳史・北田成磊・石留之然の八人が選ばれた。

〈訪台記〉

今回、日台青年篆刻交流展のために本協会を代表して井谷理事長・古溝常務理事、出品者から石留を除く七名の合計九名が訪台しました。三月十日に関空から出発、昼過ぎに台北桃園空港に到着、中央研究院歴史語言研究所歴史文物陳列館を見学しました。この歴史文物陳列館は一九二八年に初代所長の傅斯年が歴史語言研究所（史語所）を設立したことにはじまります。傅所長は博物館の設立目的を国民の教育に定め、国民の基礎的教養の向上と文化方面への関心を高めることを目標とし、ただ骨董を収蔵し、展示するだけではない博物館を目指しました。そのため展示方法や照明の当て方などに他の博物館にはない工夫がなされ、初日から大変充実した時間を過ごすことができました。

学し、代表的な翡翠白菜や肉形石、西周晩期を代表する毛公鼎などを鑑賞しました。午後からは恵風堂を訪れたところ、たまたま地下の書籍部のギャラリで台湾の南風印社展の開幕式があり、急ぎよ井谷先生が特別ゲストとして開幕式に出席される一幕もありました。その後は今回の目的である日台青年篆刻交流会開幕式に出席すべく、会場の国立国父記念館に向かいました。国父とは孫文のことでの記念館は孫文の生誕一〇〇年を記念して一九六六年に中山公園の中に建設されました。毎時行われる衛兵交代式が非常に有名で台北を代表する観光地にもなっています。

開幕式ではまず台湾側を代表して中華民國国家刻学会理事長李清源先生と台湾印社社長陳宏勉先生が祝辞を述べられ、続いて日本側を代表して全日本篆刻連盟理事長和簡堂先生と本協会理事長井谷五雲先生が祝辞を述べられました。また開幕式では今回の交流展の発起人であり、去年十一月にご逝去された河



開幕式で祝辞を述べる井谷理事長

野隆先生を偲んで献花が行われ、最後は参加者の記念撮影で幕を閉じました。それから台北駅近くの天成大飯店に移動し、交流懇親会が行われました。

三日目の午前中は何創時書法藝術基金会コレクションを見学しました。何創時書法藝術基金会は一九九五年に設立され、その後多くの企画展や書へ



何創時書法藝術基金会で明清代コレクションを見学



篆刻と書の軸が整然と並び会場



青年篆刻交流展会場を熱心に参観

「籍の出版を手がけています。特に明末清初のコレクションは内外から高い評価を受けており、今回は平成二十八年四月に大阪市立美術館で開催された特別展「王羲之から空海へ」で展示さ

台日青年篆刻交流展訪台までの軌跡

台湾と日本の主だった社で展覧会が開かれるという話は一昨年、眞鍋先生から聞かされた。台北でやるから推薦してよいか？と。深くは考えずに頷いたがその後一年近く何の構想もなく忘れたままだった。去年の夏、東京で発起人の河野隆先生にお会いした折、君も出してねと言って下さった。まさかそれが先生との最期の話す機会になるとは思いも寄らなかった。十一月に入り河野先生の突然の訃報に絶句。そして理事長井谷先生より再度、出品意思確認の連絡が来た。是非にもと申し上げたが全員一致だったそうで思いを共有できて嬉しかった。そうは言いつつも新作を作る余裕はなく結局以前の作品を出すことにした。もともと訪台も無理と考えていたくらいで、出品者名簿を見てやはり行かねばと考えを変えた。なにせ日本の次世代のプレーヤーが集まる。これ以上の好機はない。訪台費用の捻出に苦勞するにも関わらず作品をまとめることには難渋した。印屏形式はやったことがなかったので手探りだった。自分に出来ないことを知る機会になった。話が大きくなっていくなかで取り残されるような焦りの気分。年末になり作品点検会が協会事務所で開催され先生方からのダメ出し。恥じ入る外はなかった。反省します。なんとか作品を仕上げ、とにかく台湾へ。頭のなかはその事でいっぱいだった。(嵯峨洛山)

れた王鐸や傅山、張瑞図などを中心に見せていただくことができました。逸品の数々をガラス越しではなく、息が届くほど間近で見ることができたことはまさに眼福の一言でした。(北田成磊)

台日青年篆刻交流展に参加して

当初、出品のお話を頂いた際、「大塚光栄で本場に有り難いお話しなのですが、本当に私で大丈夫なんでしょうか。」と、古溝先生に失礼ながら、思わず本音を申し上げた事を思い出します。日頃から色んな意味で頼りなく、自信もなく、引つ込み思案な私は、今回の交流展がとにかく不安でした。

不安と緊張が入り混じる中、台湾に到着し参加した開幕式では、理事長の井谷先生を初め、台湾・日本の先生方がご挨拶の中で、今回の交流展は台湾・日本の将来の篆刻の発展に繋がる重要な取組とお聞きされたのが印象的でした。そして、その発案をされた河野先生への哀悼の意を表し、式典の中で献花を捧げるシーンでは、参加者が皆、胸の中で涙を流した事が今も忘れられません。多くの人が参加をされ熱気溢れる開幕式終了後に、会場の作品を見せて頂き、感じた事は、台湾・日本ともに、この交流展に対する想いの強さというものでした。出品者それぞれ作風や思想は違うかもしれませんが、この展覧会に対する強い想いを共有出来た事が、とても嬉しかったです。夜に行われた懇親会では、台湾の方とも交流をしました。言葉が通じない状況にも関わらず積極的なやりとりに、人見知りな私はただただ圧倒されましたが、この日は本当に充実した一日となりました。(石川無外)



名は孟彪(もうひょう)、字は孺皮、芙蓉と号した。ほかに氷壑山人、三嶽道者、中嶽畫史などの別号があり、室号を菡萏居(かんだんきよ)といった。印聖とよばれあまりにも有名な我国印人である。

さてこの印は『書道講座(八)篆刻』(二)玄社)にも所載されている印で、材は銅印(真鍮)であり鈕の部分に写真の如く「孟彪」と款がある。印面は秦漢のものに比してかなり浅い。先日私は別に東京で高芙蓉自刻自用の銅印を拝見したが鈕を含め全体は春秋戦国の古璽に酷似していたし、この印も古銅印に我邦のモダニズムを加えたものに見える。これらことから考えると、芙蓉は秦漢古銅印の印譜だけでなく、実物さえも見ていたと考えられるのではないか。この事について何か参考資料をお持ちの方は、ご指導をお願いできればと思う。この写真を見ても分かるように鈕も刻も我邦独特のものといえよう。尚、この印には明治二十年(一八八七)に中井敬所が鑑定した紙片が添えられている。残念ながら手元に高芙蓉の印譜がない為この印がどの印譜に所載されているかを確認できなかった。後日自分の課題としたい。

※日本における古銅印の研究について久米雅雄氏の『日本印章史の研究』(雄山閣二〇〇四)中に『骨董図彙』という本も紹介されているので是非読んでみられると良い。江戸期における我邦の金石学に対する考え方が良く理解できると思う。

展覧会成績

改組新第四回日展

入選

- 井谷五雲 真鍋井蛙
- 小朴圃 黒田玉洲
- 出田塘葭 古溝幽畦
- 関踏青 井後雅堂

読売新聞編集委員が取材した尾崎会長に関するコラム記事が掲載されておりましたと会員から提供がありましたので紹介します。

実に久しぶりの台北だった。1985年、青山杉雨さんに同行し故宮博物院などを訪ねて以来で、当時の台湾はまだ民主化以前だった。今回の目的は先月23日から5日間、台湾師範大学そばの蕙風堂ギャラリーで開かれた尾崎蒼石篆刻書画展の取材である。

出発前、事情通に聞いたら、蕙風堂は北京なら榮王斎、上海なら雲軒みたいな所というので、台北を代表する筆墨店と理解した。現地ですぐこのとえを洪能仕社長に伝えたら「大変名譽なこと」と笑顔になった。たまたまに台湾大学

書
2018
編集委員・菅原教夫

首席合格の逸話を裏切らない人柄を感じた。社長にとると、

尾崎蒼石さん 台北で個展



尾崎蒼石さん(左)と洪能仕社長(背後は「赤花傳説」一送酒家)の2印が見える作例

1982年創業の蕙風堂は90年代から日本の出版社や筆墨店と交流を始め、2010年にはビル地下にギャラリーを開設。最近では一昨年、河野隆篆刻展を開催し、その好評を得て「じゃあ次は同じ現代書道千人展メンバーの尾崎先生ということになった」のだという。

尾崎蒼石さんは大阪市在住、梅舒道門が集う日本篆刻家協会の会長を務める75歳。梅さん譲りの文人趣味あふれる書画篆刻は定評がある。恩師を継いで日中交流に力を注ぎ、訪中回数も100回以上。昨年の晋陽印社(中国・山西省太原)など中国各地の篆刻団体と交流を重ね、この間培った人脈も今回の海外初個

展の実現に役立ったようだ。60点の作品が並んだ会場では、書印一体の軸物が大きな見所だった。自由感に満ちた印と、その印文の古典となった詩文の書からなる。梅さん譲りのこの形式は印影だけが並ぶ篆刻展とは違って変わって変化に富む。好きな陸游(南宋)を題材にした作品が多かった。たとえば白文「売花得銭」と朱文「送酒家」の2印を押した作品には「花を売って銭を得れば酒家に送り……」の一節を含む名詩の書が展開し、酔った花売りの翁に自らの晩年の隨者的境地をだぶらせる大詩人の面影が蘇った。

本展については「作品に幅があり、多様」(藤平南・台湾印社副社長)、「古典を踏まえつつも自分の世界を築いており、実に文人的」(鹿伯松・墨游当代芸文雜誌社代表)など好意的な評が相次いだ。幼いころからの古典学習を踏まえ、長じては自由にかく中国の書人たちに尾崎さんの作風は共感できるようだ。

歓迎の宴が盛り上がった一夜、「自由はいけれど現代中国の書はかきつばなしとの批判も日本にはある」と突っ込んだら「書作では形を整えるよりその時の気持ちで大切にしたい」「鹿代表」とか「日本人とは作品や空間に対する身体の反応、感じ方に違いがある」(李清源・中華民国篆刻学会理事長)などたちまち熱心な反論を浴びた。互いの違いを知ることこそ文化交流の意義と、腹の底から愉快な気分になった夜だった。

文化 アート&エンタ



青鏡忘詠(十一) 小朴圃 「銭湖婿農」

掲出の呉昌碩刻「銭湖婿農」を初めて見た時の衝撃は大変なものだった。即ち農字の最下部の弧の処理が、湖字の月の収筆を横に伸ばして、サインを短くしたことと連動して、下辺が大きく波打つように計画されている。この曲線は上二字にも用いられ、というより四字全てに曲線が配置されて調和を計っていることに気付かされる。篆刻とは只正しい篆書だけを布字し刻すだけではなく、いかに章法の工夫をするかによって効果が全く違ってくることに、ワクワク感を覚えた最初の頃だったと思う。

今、久し振りに削瓢廬印存を開いてみると、その頃に喰い入るように観て汲み取った作を見るにつけ懐かしくもある。技倆は未熟ながら原印から受ける感動を身につけたいものと、ただひたすらに彷彿していたものだ。が、未熟な技倆では良いものができる筈もなく、師や先輩諸氏からはいつも妙なデフォルムをせず極普通に刻せと、何回も言われ続けたであろう。今頃になって漸く、その微妙な線の味の良さが判るような気がするが……

各印社活動 トピックス

第二十四回一隅会展



平成二十九年九月二十九日～十月一日の三日間、大阪市立住まいミュージアム企画展示室において第二十四回一隅会展が開催されました。三日間の開催でしたが斉平展と期間が重なり、両展覧会参観のため東は東海・関東はもとより

北海道から西は九州から多くの方々が来場され、池田泥異、喜多芳邑、黒田玉洲、古溝幽畦各先生方の書・篆刻作品、遊印を興味深く熱心に参観されていました。

四人の先生方の個性豊かな作品を比較鑑賞する事ができ、それぞれの先生から丁寧な解説や製作中の苦労話等お伺いする事ができました。大変興味深く勉強になり、今後の作品制作に生かせたらと思っています。

来年の第二十五回展は神戸で開催とのこと、今から楽しみにしております。(松本清苑)

第二回有機篆会篆刻作品展

第二回展を十月二十三日から十五日までの三日間、高岡市美術館市民ギャラリーにおいて開催しました。今回は、大伴家持生誕一三〇〇年を記念し、万葉集に題材をとり「万葉の花」と題して短冊の作品を中心に、会員の自由作品を含め二〇点余りを展示しました。おりしも高岡市美術館では「家持の時代展」が開催されており、越中万葉歌百選の共同作品の軸等も有り大勢の観覧者に来て頂き好評を博し、和やかな雰囲気の中会期を終える事が出来ました。(宇於崎碧峯)



デザインとして見る篆刻の展開 不華篆会習作展XXV

「風」字をデザインして生活の中に書・篆刻・



不華篆会習作展XXVを平成二十九年十一月三日～五日の三日間、伊丹市立工芸センター、又丹波展として同内容で十一月二十八日～十二月七日の八日間、兵庫県立丹波の森公苑にて開催。

この展覧会には各自、篆刻作品と工芸的要素のある作品との二点を出品することとしている。工芸作品は「文字をデザインして生活の中に」をテーマに、最近では「雪」「月」に続き今年「風」字である。特に、毎年新しいものを考えるのは大変ではあるが、良き頭の体操と楽しみでもある。毎年楽しみに来館くださる方もおられるので、次回も頑張ろうと自らを励ましている。(木村谷庸)

第二十六回 篆刻と書遠邇篆会展

平成二十九年十一月二十一日から二十六日まで、磐田市立中央図書館で開催した。

篆刻作品二十八点、書作品六点、刻字作品二点の外、机上には「平家物語」章題分刻作品五十二印と西湖十景折帖作品十印(いずれも印影と印材)を展示した。

会員減少による作品展スペースの空白が心配されたが、一人当たりの出品点数を増やして量的充実を図り、解決した。篆刻の楽しさを伝えるためのパンフレットも用意した。

篆刻家協会会員の方には、市外・県外からも来ていただき感謝。また熱心に観覧され、質問される方もあり、少なからず私たちの刺激・励みとなった。

二十四日は休館日のため、会期は五日間となったが、入場者総数は二七八二人であった。

(鷹取千豊)



第十七回蒼文篆会展



第十七回蒼文篆会展を十二月一日〜三日、大阪美術倶楽部に於いて開催した。

今回は三〇程度の小印の作品を作るといふことで、公募展とは違う雰囲気の商品が並んだ。中国招待として、山西省の晋陽印社の幹部作品を陳列、開幕式には陰鳳華先生を団長とする代表団二十九名が参加された。

また、別会場にて「日中国交正常化四十五周年記念、江戸期に於ける日中の文化交流」と題し、来船僧及び来船画家と、影響を受けた日本の文化人の作品を陳列し、好評を博した。

(尾崎蒼石)

第十二回娯暉文会展

昨年十二月十五日〜十七日の三日間、兵庫県民会館アートギャラリーにて第十二回娯暉文会展を開催致しました。

アートギャラリーの大・中展示室には井谷先生の「有終身之憂無一朝之患」の大作と「怡齋藏傳瓦硯譜」を始め会員それぞれ渾身の諸作品、分刻作品を展示しました。娯暉文会展は二年毎の開催とし、その二年間、日々研鑽し腕を磨いた成果をこの展覧会に発露することが求められています。皆さん方の作品はその成果が如何なく発揮されていたと思います。新たに次の課題も見えたのではないのでしょうか。

小展示室では中林千影、畑間青露による二人展を併催し、中林は訪中時印象深かった嵩山を題材とした、畑間は呉春ゆかりの大坂池田に思いを馳せた作品、また龍門石窟を詠んだ韋応物の詩をもとにした兩名合作の作品は、後に続く我々に大きなインパクトと刺激を与えてくれました。

この三日間、延べ約八百名の方々にご高覧頂きました。紙面を借り御礼申し上げます。

(水中澄山)



六轡会書法篆刻 三面六臂展

井蛙兄から合作せよと送られてきた作品は、何と半切の大きさのほぼ一杯に甲骨文でビッシリ書いてある。空きは左下隅にほんの僅か。読むと蘭亭叙だ。甲骨で

蘭亭叙全文が揃う筈がない。そんなことを書き加えようかと考えてみるが、それでは無粋にすぎ、困った挙句ふと頭に浮かんだ鷺鳥を二羽放った。経験の少ない小生、写実では描きようがないのでマンガ的にやるしかなかったのだが、これを他の一人が、風呂のアヒルのおもちゃかと笑うもをかし。

その五雲兄は小生の拙い農村の画を見て見事な詩を作つて、広い余白に堂々と書した。合作、それは何をどのように書き添えるか、何を考えたのかの全てが問われる。厳しくもこんなに面白いものはない。

六轡会 書法篆刻 三面六臂展、一月六日、二月四日、北海道から九州から態々来られた約三千名の方々、いつもの篆刻作品とは違った感想を持たれたことだろう。篆刻は勿論その中心にはあるのだが、書や画・詩・デザイン等々やりたいたいことが多すぎる。

(小林圃)



第四回伍葉展



一月二十六日から二十八日まで神戸・元町みなせ画廊で開催しました。齊平篆会の東尾高岳、娯暉文会の稲垣華扇、畦石舎の北田成福・石留之然、蒼文篆会の井後雅堂を始め、今回で四度目となりました。

いつも伍葉展にちなんで五にまつわる物をテーマにしており、今回は梅・蘭・竹・菊の四君子に松を加えた五君子をテーマとした作品を合装しました。

通りすがりで来られる方やインターネットを通じて来ていただける方もいて、三日間で三百人を超える来場がありました。中華街が近くにあることもあってか、中国の方にもたくさん見ていただき、新たな繋がりができました。

多くの方に御来場いただいたことを感謝するとともに、次回展に向けてまだまだ精進をしながら進めたいと感じました。今後ともご指導お願い致します。(井後雅堂)

展覧会案内

▼随風會（山下方亭）

第三回随風會書法篆刻展

会期 四月四日～八日

会場 京都市美術館別館

特別陳列 近代日本の書

特別企画 明代書画作品展

▼第三四回日本篆刻展

会期 四月一八日～二二日

会場 兵庫県立美術館王子分館（原田の森ギャラリー）

併催 第二回日本篆刻家協会学生展

特別展観 赤壁賦にちなんで

▼第一〇回日本篆刻家協会役員展

会期 四月二八日～六月二日

会場 古河市 篆刻美術館

報告

▼畦石舎（小林圃）

篆刻・書・画

第三回畦石舎作品展

会期 九月二日～三日

会場 日図デザイン博物館

▼篆刻社（古溝蘭畦）

第一〇回篆刻社游藝展

会期 九月一五日～一八日

会場 兵庫県立美術館王子分館（原田の森ギャラリー）

▼齊平家会（真鍋井蛙）

第二〇回齊平展

テーマ展示「寿」字印

会期 九月二九日～一〇月一日

会場 大阪産業創造館

併催 会員蔵 日本印人作品（江戸期）

協会行事

常務理事会

二月八日（土）
錦城閣

平成三〇年度

日本篆刻家協会

常務理事会・理事会

総会・新年会

二〇一八年一月七日（土）
シエラトン都ホテル大阪

東西印人交流会

二月二日（月）

名古屋東急ホテル

第三四回日本篆刻展 審査会

二月二五日（日）

兵庫県立美術館王子分館（原田の森ギャラリー）

予定

第三四回日本篆刻展

第二回日本篆刻家協会学生展

四月一八日（水）～二二日（日）

兵庫県立美術館王子分館（原田の森ギャラリー）

授賞式

四月二二日（土）

ANAクラウンプラザホテル神戸

第一〇回日本篆刻家協会役員展

四月二八日（土）～六月二日（木）

古河篆刻美術館

第二回中央研究会

『赤壁賦にちなんで』

八月四日（土）～六日（月）

舞子ピラ

常務理事会

二月一〇日（土）

錦城閣

募 第34回

日本篆刻展

●特別展観 赤壁賦にちなんで ●併催 第二回日本篆刻家協会学生展

2018年
4/18(水) ▶ 22日
10:00～17:00 (入館 16:30まで)
(最終日は 16:00 終了)

兵庫県立美術館王子分館
(原田の森ギャラリー)
神戸市灘区原田通3丁目8-30
電話(078) 801-1591

主催 問合せ先
日本篆刻家協会
大阪府池田市石橋2丁目2-10
牧野ビル203号
電話(072) 760-3852

後援
兵庫県・兵庫県教育委員会、神戸市・神戸市教育委員会
中国社大阪総務事館、大阪府日中友好協会
公益財団法人 兵庫県芸術文化協会、神戸新聞社

編集後記

☆平昌冬季オリンピック・パラリンピックが閉幕した。日本代表選手団の、特に若年層の活躍には目覚ましいものがあった。

☆テニスのグラランドスラムに次ぐ大きな大会で、二十歳の大坂なおみがツアー初優勝を飾った。優勝は日本人女子として初となる快挙。

☆スキージャンプの高梨沙羅二十一歳がW杯で今季二勝目を挙げ、自身が持つ男女を通じてのW杯歴代最多勝利記録を五十五勝に伸ばした。

☆将棋の藤井聡太が中学生でプロ入りし二十九連勝。その後も上位に勝ち続け六段に昇格。このほど開催された第十五回詰将棋解答選手権チャンピオン戦で、全参加者の中でも唯一の全問正解で、新記録となる四連覇を達成した。

☆わが篆刻界でも本紙面記事のとおり、日本と台湾の青年篆刻家が一堂に会し、競いあい交流し、次代を担おうとしている。日本篆刻展併催の第二回学生展にも小・中・高校生から多数の出品があり、広がりをみせている。

☆今後の篆刻界を担い発展させる若者たちのパワーにこれからも期待したい。(石柱)

編集・広報部

酒店石荘 木村容庸
戸出九蔵 畑間青露

お気づきのこと、ご意見など
事務所までお寄せください。
FAX 072-760-3853
MAIL info@n-tenkoku.jp